

会長講演

近世自家医学遺産の諸分析

田中祐尾

大阪市立大学医学部

近世河内の国若江郡八尾東郷村に丁度四百年存続した自家の医学遺跡遺産については、約三十年を経て諸家の学問的分析がなされ尚完結に至っておりません。今回図らずも第一〇八回総会の会長職に任ぜられることとなり、その遺産の現在までの集積を要約して会長講演とさせていただきます。

一九九一年に大谷女子大学において「草莽の医学」展として特別展示が開催され系統的分類の第一歩がなされましたがその後地元教育委員会、郷土史家、哲学者、文学者そして医史学者など各分野の先生方が再三遺跡発掘、古文書や書籍の分析、同定そして専門分野での著述、発表などを重ねられて現在に至っております。従いまして今回私が講演致す内容はほぼ全てが十指に余る学者各位の分析のリポートでありまして、そこへほんの少しばかり、当主にしか解らない私見を交えさせて頂いております。

「彌性園（やせいえん）」と称する医院、文庫、私塾、薬園、そして一時期知識人たちのサロンなども形成していた約四百坪の敷地には昭和五十七年の解体まで二つの土蔵が残り、上蔵と称する一つに数々の古文書類と古書籍が温存されておりました。儒教の宗教的洗礼を受けた八代元緝は父元允（もとのぶ）の埋葬を儒墳に変更し仏壇を祠壇

(堂) に切り替え、以後昭和初期まで儒教による祭祀が営まれておりました。懷徳堂での儒教そのものに心酔したためで、代々の儒墓がこれほど長く一大家族単位として存続するのは日本的にも稀有なこととされます。

十四代に亘る先祖の各人については解らないところが多く、時間の関係で本日は初代基則(もとのり)、八代元緝(もとつぐ)、幕末の九代元資(もとたか)そして十代寛治郎・十一代徳太郎の兄弟、祖父の十二代太一良に焦点を絞ります。

初代基則は豊臣秀長に仕え十六世紀の末頃戦国の世を武将としてまた軍医として活躍します。朝鮮出兵にも関わり大和郡山の医師たちを肥前名護屋へ派遣したり、徳川家康との生存競争のただ中、秀吉の命により大陸朝鮮からの膨大な薬石、医学書の蒐集に関与します。明国から直輸入されたと見られる医書数十部に、現在最終的な分析が北里研究所東洋医学総合研究所小曾戸洋教授一門の手でなされておりまして、そのうちの数部を世界的奇観本との事で、是非、供覧したく思っております。

基則はまた秀長の家来として大坂城内において晩年の曲直瀬道三と直接出会って知見を授かった可能性がありません。道三直筆の一枚書き「切紙」が彌性園の家宝として伝わっております。

以上は大和郡山市史、三輪叢書、和州諸將軍傳、逸史、田中家来歴書、同墓碑、同過去帳などの記載から推定されたことです。基則の家臣の在所が河内上之嶋に在ったため、大和郡山を追われた子孫は更に東郷村に定着し、豊臣の遺産をひっそりと受け継いだまま基則の出自である三輪神社の神方医学や鍼灸本草学などにも手を染めて、農民兼村医者として約一世紀半が過ぎます。

十八世紀も後半になると河内の里は綿作を主とした農民による経済力が折から台頭しつつあった米本位制での「なわ」の町民経済と支えあう形となり、大坂では裕福な庶民層による町民文化が勃興し「懷徳堂」などの学校や「混沌社」といった語学、文学の結社が生まれます。

八代元緝は日々診療の傍らこのどちらへも出入りして、取り分け町民学者の代表木村兼葭堂や詩人片山北海らと親交を深め、兼葭堂からの直信のほか師への惜別の詩が、北海へは弟子としての哭文が遺されています。また懐徳堂では中井竹山学主により限られた人へのみ為しえた「大日本史」全巻の筆写が許されました。寛政の改革に加わった尾藤二洲、古賀精里、柴野栗山といった人々との書簡もあり当代最先端の知的接点を経て、地元へのネットワークにもなったことが判ります。元緝は四十代で彌性園での蘭学事始に挑戦して古今東西あらゆる医学への涉獵を志し独自の処方辞典「彌性園方函」の編集に着手しますが、生前に未完のまま嗣子元資がこれを受け継ぎ、幕末に完成させたものが朱筆入のまま遺っています。時まさに、押し寄せる西洋医学の波に飲み込まれ、遂に発刊には至りませんでした。

九代元資は慈父の遺志を継ぎ地味ながら着実な村医者に徹して安政六年五十九才で没するまでの四十年間を、コレラや天然痘等、インフルエンザといった幕末の渡来疫病と必死に格闘します。平成十三年地元の郷土史家森田康夫氏は彌性園土蔵から慶応三年までの幕末の約十年間の診療録を見つけられて徹底的に分析されました。その内容が普遍性、庶民性、地域性といった報道理念とマッチし、NHKテレビが三度にわたって放映し、同ラジオにまで採り上げられ、彌性園の先祖たちは、大いに面目を施す事となりました。

内容は診療録といっても現今のものとは隔たりがあり、彌性園のネーム入り野紙にまず薬名、符号、投与日数、転帰（全快・休薬・再出、空白・死亡）、村落、氏名（名のみが多い）といった調子で一見変哲は無いのですが、投薬や疫病の傾向、地域的統計、生存率などについてかなり徹底した分析がなされました。医療の内容もさることながら、医療費の支払い方法や村医者の収入など、例えば米札や砂糖での支払い、元資の年収が五十九両であったなどという事実が視聴者の興味を魅きました。寛治郎は幕末風雲急を告げる京洛で勤皇の志士らと接触し、藤樹書院文献の名簿に禁裏医師として氏名があります。河内では天誅組の旗揚げに奔走し藤本鐵石、梁川星巖、頼三樹三郎、伴林光平ら

を医師として支えた形跡があります。徳太郎はひたすら村医者のととめと彌性園の幕引き役に徹して緻密な筆致で文献書籍の整理をしております。明治十三年九月には兄寛治郎と共に西洋医学による医師開業試験に合格した河内十二人衆に加わり、地域住民への西洋医学の移植に苦心します。大阪高等医学校を明治三十年に卒業し彌性園初の西洋医師となった太一良は中河内郡医師会長として医療と防疫行政に携わり、近隣町村合同の「八尾避病院」を設立。近郷のコレラ患者の治療、隔離、消毒滅菌の手法を広めます。これより先設立間も無い北里研究所に短期留学し、北里柴三郎、志賀潔らの授業を直接受けたノートがのこされています。余りにも公に働き過ぎた太一良は現職の八尾町長として昭和七年、陸軍大演習の設営準備中に雨に濡れたまま肺炎を併発して急死します。

以上がお国に尽くし、文字どおり地域に骨を埋め、尚且つ継統を絶やさなかった一村医者系の系図であります。長い封建社会に生きつつ、さほど高邁な理想やさしたる特権意識なく、ただひたすら病を憎み人を癒し、名声を求めぬ村の「祐篤(ゆうあつ)はん」(代々の通称)でありつづけた、そういった物語であります。